

1. 発病から収容まで

まずは、ハンセン病の発病から療養所に収容されるまでの体験についての語りを紹介していきたい。「発病」時の周囲の対応、あるいは、本人が受けたショックといったものは、「癩予防法」のもとで人びとに植え付けられていった差別偏見のありようを照射していよう。それは、払拭すべきハンセン病にたいする差別偏見として、これからの啓発のターゲットでもあると思われる。

また、「調査票」では、療養所への入所のいきさつについての回答として、「物理的強制による入所」「心理的強制による入所」「きちんとした説明なき入所」「他の選択肢なき（一見任意での）入所」「その他」の5つの選択肢を用意したけれども、当事者による生の語りは、じっさいには、これらの要素のうちのいずれかひとつが際立っていたというよりも、もっと諸要素が複合的にからみあったかたちで、「入所＝収容＝隔離」への有形無形の強制力が働いていたことを、具体的に示している。また、「調査」である以上、「自発的入所」という回答の余地を残しておかざるをえないと考えて、「その他」の選択肢を用意したのであるが、「わたしのばあいは強制収容ではなかった」「自分から願って入所した」と、言葉としては語られ、調査員が「その他」に○を付けたケースでも、その言葉を前後の語りの脈絡のなかで読み取っていくとき、けっして、純粋な意味での「自発的入所」ではありえず、「強制隔離政策」のなかで、本人の主観を超えて、ハンセン病療養所へと追い立てられていったものにほかならないことが了解できよう。

語りの資料は、療養所への収容時点の古いものから提示する。そのため、最初に示すのは、ご本人は患者ではなく、病気の夫と一緒に栗生楽泉園の自由地区へ入所したケースである。この女性は、海軍軍人だった夫が1935年ごろに発病し、海軍を追われ、ふたりは居場所を失い、1938年、入所勸奨を受けて、夫婦一緒に住めるのならという条件をつけて、長島愛生園に入所したが、約束とは違ったので、栗生楽泉園の「自由地区」に移って、以来65年以上の長きにわたって療養所内の生活をしてきた人である。彼女はその体験を、つぎのように語った。

主人は軍人でしたから、それまではすごく順調に、幸せだったんですけど、ある日突然、額に白いナマズができて、それと同時に、全部いままでのものは、なしになって。それで、もう、身の置き所がなしになりまして、それからもうみなさんと同じに。どこにどうして住めばいいかなと。

ちょっと、ここへね、ナマズが出て。病院で見てもらったら、もう、そのときっきりで、「海軍はやめてください」と。「いてもらうわけにはいきませんよ」と。

主人はね、ぜんぜん人の前へ出ないんですよ。そのころから眉が抜けてきたから。もう、嫌だって。「もう人に顔を見られるのが嫌だから、おれは田舎へ帰る」ゆうて、そのまま、さあーっと、鳥取の山ん中へ帰っちゃったんです。それで、しかたがないから、わたしも、あとを片付けて、鳥取へ行って。鳥取行っても、警察やなにが調べに来るんです。現在、どうしてるか？ 病状はどういうふうか？ これはどこまで行ったら、隠れるところはないよ、言うもんでね。それで、いっそ、田舎のほうが目につくから、米子の町外れで、あんまり目立たないところへ家を探して、そんなところなら

いいんじゃないかなあ言うて、米子へ引っ越したんです。それが2月（ふたつき）目くらいには、もう、ちゃんと、調べに見えました。

そのかんね、2、3年、どうしようかなあ思って、迷いながら。そのかんにも、ちょっと、この病気の勉強をすればいいんだけど、もう怖い怖いで、全然ね、そのほうの知識がないから、余計におっかなくてね。そこへもってって、いちばんの頼りにして、親代わりだった主人の兄が、「気の毒で、かわいそうだけど、うちに子どもがいるから、これから結婚の適齢期を迎えると、いろんなことで、差しさわりになるから、うちへは出入りしてくれるな」って。それっきり、一切、音信不通で。もう、「こういう病気はふたりだけで終わればいいんだから、誰にも頼るまい。もう、そのほうがいいから」言っつて。——こっち来てからも、ぜんぜん、親類もなにも……。わたしは末っ子だったから、わたしより上が5人いたが、みんな死んじやって、結局、自分に身内がひとつもないんです。天涯孤独で、気持ちか、かえって楽。もう迷惑かけることないな、思っつて。

で、毎日のように、警察からと、愛生園から先生がみえて、とにかく、ここにはおれないんだから、愛生園へ入るように勧められて。で、いろいろ、ふたりで相談して。まあ、「最後までふたりで一緒に住めるんなら入れていただきますしょう」。そのときは、「そういうことは例がないから困るんだけど、なんとかしましょう」と、こう、おっしゃったんで、そのように思っつて、あれは〔昭和〕13年の5月に、愛生園へ入れていただきました。

入れていただいたのはいいんですけど、その途端に、「ご主人は病者地帯へ行ってください。奥さんはこっち。病者地帯へ足を入れてはいけません」って言うの。全然、話が違っつて。それから、わたしは、毎日のように、本館へ呼び出されて。「いまのうちに、くにへお帰りなさい」「あなたを入れる療養所は、日本中どこにもありませんよ」と、そう言っつて、毎日、お説教されます。それでも、5日か6日いて、食事もなんにもいただけないから、前の島から運んでもらっつて。それで、あそこの棧橋のところ、分館の前のほうに畑があっつて、そのなかに面会人宿泊所が、6畳と3畳くらいのがぼつんと建っつてる。そこへわたしがひとり、入れてもらっつて、毎日、呼び出して、お説教されます。でも、結局、「わたしは、もう、その覚悟して、全部片付けて、なんにもなしにしてきたんだから、帰るところはないから、帰りません。そういう約束で、ここへ入れてもらった」。「いや、そのときはそうだったかわからんけど、とにかく、日本中、あなたの入るところはありません」と。毎日、そう言いきられて、しまいには、「あなたがそういうふうにならばと、ご主人に迷惑がかかって、ご主人が不幸になりますよ」と、こう言われましたよね。それがもう少しわたしが、本病のことを知っつていれば、そりゃ、もつともだなと。いまならわかるんですけど、そのときはもう、急に病気になっつて、もう、頭が変になっつてるから、そんなこと全然考えられない。でも、警察も「なんとかしましょう」言われ、病院のほうも「そこまで言われるんならなんとかします」と、こう約束して、そいで、うちを片付けたんだから、だからわたしは「もう動きません」。その一点張りで、5、6日いました。そしたら、むこうで困られたんでしょ。ある日、夜遅おくに、職員の方が戸をたたいて、「じつは、日本に、ひとところだけ、あなたの行けるところがあるんですよ」って。それで、パンフレット持っつてき

て、「草津へ行けばね、家を買えば、自由地区にはね、普通の人が介護に入れるところがあるんだから、どうしてもあなたが、このままでがんばるんなら、そこへ行ったらどうですか」と教えてもらって。それで、うれしかったから、すぐそのあくる朝、主人のどこまで行って、相談したら、「行って見てきてくれ」って。そう言われるから、わたしもすぐその足で岡山へ出て、それで、こっちまで来て。そのときに、ありがたいことに、本館の大林さんが添え状を書いてくださって、「これを見せて話をしなさい」と。それで、それをいただいて、読んでもらったら、「ああ、こういう事情なら、いつでも来なさい。1軒、小さい家が空いているから、そこを支度しとくから、すぐ来なさい」。とって、そのときのうれしかったこと。だから、わたしは、みなさんのように、くやしい、情けないばかりじゃなしに、ずいぶんみんなに助けられて、うれしい、ありがたい思いもしてるんだから、何があってもわたしには愚痴はこぼせない。そう、まあ、いままで黙あつて、ここまでね、こさしてもらって、いま、ほんと幸せなんです。

来た当座はね、「ここは壮健の来るところではない」と。まあ、そういう者が来れば、なにもかも、なんだかで、自分たちが損をすると。だから、ことごとく冷たい目で見られて。そこへもってきて、わたしは関西の人間だから、どこやらのんびりしてる。関東の人はパンパカパーンなんて言うんで、なに言っても叱られるようで、こわいなあ思ってた。結局、家から出ないことにして。ほんとに、だんだん、もの言うことを忘れるようになりました。

ある入所者（男性、1939年多磨全生園入所）は、自分が1939年に多磨全生園に収容されたのは、〈一見任意だけど他に選択肢なき入所〉だと語る。療養所の外でハンセン病の医療体制が整っていさえすれば、入所の必要はなかったということであろう。

わたし、早生まれだから、6歳〔になったばかり〕で入学しなきゃなんないのに、熱を出したり、ひどく病弱になってたんですよ。で、父が「〔入学を〕1年遅らせよう」と。で、7歳で入学した。そしたら、入学して15日ぐらい経ったら、身体検査があるよ、と。で、身体検査に行ったら、校医に診てもらったら、「ここ、どうしたの?」って聞かれた。

肘のところに、やはりハンセン病の「母のからだに出てるものと似てる」「斑紋」が出ていたのである。

翌日、学校へ行ったら、担任の先生が、「きょうも、校医の先生に診てもらいます」と。で、わたし「嫌だ」つって、ランドセルも置いたまま、泣きながら家へ帰ってしまった。そしたら、担任の先生がランドセル届けながら来て。わたしが家のなかで物陰に隠れていたら、父が対応して。で、「身体検査をもう一回受けてもらわなきゃ、学校に来られませんよ」と。「いや、子どもが嫌だつて言ってるから、もう学校へ来なくてもいいと言われるなら、行かせません」というふうに父が言ってる。で、終わり、学校の関係、それで。それ以後は、なんにも言わなかった。

わたしはすぐ、父に連れられて、東大病院に行きました。で、東大病院で診察を受けたら、看護婦さんや医学生みたいな人たちが大勢いて。それで、医者がなんか言ったら、いっせいにマスクしだしたんで、“ああ、これは本当に病気なんだな”と。それで、父が医者の説明を聞いたみたい。出てきてもなんにも言わずに、「帰ろう」と言うんで、帰ってきて。

父が「東大でも、そう [=ハンセン病] だというふうになった」ついたら、母は服毒自殺をはかって……。わたしは、ちょうど学校に行かないでいたもんですから、遊びに行き帰ってきたら、うちは雨戸が閉めきってあってさ。変だなあと思ったら、プーンと、戸を開けてみると臭う。玄関、鍵がかかってんだ。で、裏口から入ったら、変な臭いがする。さらに入ったら、母がいびきかいてる、布団のなかで。で、まわりに、吐いたものが、白い。それが臭ってた。吐いたから、よかったんかもしれないね。青酸カリやなんかだったら、逝っちゃったんだらうけど、わたしにはよくわからないけども、猫いらずとか、そういうもんだと思うんですよ。で、わたしが大騒ぎしたもんだから、隣近所の人が、父に連絡とってくれて、父がすつとんで帰ってきて。医者をすぐ呼んで。わたしいまでも覚えてるけど、お医者さんが、看護婦さんを1人連れて来て、母に注射を打ったら、「痛い」つったんだね。それで、「助かりますよ」って医者が言って、帰って行ったんだ。

そのあと、一命を取りとめた母にはじめて抱かれるんですよ、わたし。それは、いまもしっかり覚えてますけどね、“いやあ、母って、こんなにあったかいのか”と。で、母の涙が、こう、顔に落ちるわけ、おれの顔にさ。うん。その涙まであったかく感じてさ。そういう思い出ありますよ。

彼を出産後、母は多磨全生園に強制収容されたが、育児をはじめとして生活に困った父親の手引きで「脱走」していたのであるが、「母は〔わたしに病気をうつしてはいけなくと考えて〕わたしを抱くことなく、わたしがそばに近寄ると、いつのまにかいなくなる。そういうので、わたしは母に抱かれないで、さびしい幼児期を過ごしたんですよ」という事情があったのだ。

〔結局、わたしが〕収容されるのは、母が「もう一度、療養所へ戻ります」と言って、一緒に行くんです。——大風子油っていう注射があったでしょ。母は、その注射は自分には効かないって思っていたけど、わたしには効くかもしれないと〔考えた〕。わたしに〔大風子油の〕注射を打たせるため〔に、母は療養所へ戻った〕。だから、わたしは、母に抱かれたりなんかしてさ。怖くもなんともないっていうか、けっこう、のんきに療養所へ入りましたよね。で、母と一緒にいられるとばっか思ったら、収容病棟で消毒されたり、診察なんか受れたり、1週間ぐらいいて。そんで、わたしは少年舎、母は不自由舎に、別れ別れに入った。

ある入所者（男性、1941年栗生楽泉園入所）は、1938年、旧制中学での身体検査の場で病気がわかり、即座に「退学」とされた体験を、つぎのように語った。

旧制中学4年の1学期のときに、身体検査あったんだよ。生徒がみんな裸になって並んで、校医の前に行って、それで担任の先生が校医の言うことを処方箋に書くんだよ。私の番になったときに、校医が診て、「あ、この人は、そこに書かなくてもいいから。それは、私があとで書くから」って、担任の先生には書かせなかったね。それで、あとで、家のほうに連絡があって、親が来てくれと。行ったらいいんだね。それで、担任の先生から、「こういう病気だから、もう一日としてここにいてもらっては困る」と。即時、退学だよ。

この入所者は、このあと、東京の「病人宿」から、草津の湯之沢の旅館での療養生活をへて、湯之沢解散にともない、親に金を出してもらって、栗生楽泉園の「自由地区」に若夫婦で入居した。そのおつれあい（女性、1941年栗生楽泉園入所）が、草津の湯之沢の宿屋で点灸治療をしていたが、湯之沢解散で、栗生楽泉園の「自由地区」に移った経緯を、つぎのように語った。本人は「強制収容で来たわけではない」と言うが、明らかに、〈他に選択肢なき入所〉である。

〔昭和〕16年の暮れに、ここへ。ちょうど、むこうの人〔＝隣室にいるおつれあい〕が〔湯之沢の〕同じ宿屋にいたんだよ。で、「一緒に入らないか」って。で、まあ、一緒〔＝夫婦〕になって入ったわけだ。だから〔昭和〕16年の12月20日に入ったのかな。

湯之沢に3年もいるとね、「あそこ〔＝栗生楽泉園〕へ行ったらもう絶対に出られない」ってことだった。「終身刑だ」ってことだった。それでも、どこも行きようがないもの。

無理に強制収容で来たわけじゃないんだよ。湯之沢解散で、そこに住めないからこっち来た。まあ、湯之沢がありゃあ、まだ入らなかつたかもしれない。ここへ入ったら、ちょうど、戦争が始まったときでしょ。〔昭和〕16年だから。だんだんだんだん厳しくなって、食うや食わずのご飯で、自分で畑を、笹藪（ささやぶ）を、笹を刈って、開墾して。堆肥をとったり、ほんとに〔苦勞しました〕。

ある入所者（男性、1944年栗生楽泉園入所）は、1944年、私立大学の予科在学中の19歳のときに、京大病院で診察を受け、ハンセン病だとわかったときのショックを、つぎのように語った。

父がちょうど下宿へ訪ねて来ましてね。「顔がむくんでるようだし、いっぺん診てもらったほうがいいよ」と。で、「できるだけ大きい病院がいい」って父が言いますから、じゃあ京都大学病院がいいと、そう思ったわけです。

はじめ、皮膚科に行って。皮膚科の先生が、こう、ちょっと、針で刺しましたね。それで、なんかメモ書いて、看護婦さんが「じゃあ、一緒についてきてください」って。ちょっと表へ出て、いちばん端っこが、特別皮膚科のところ。そっちへ回されて、そこで診察受けたわけです。

〔小笠原登先生に〕「病気でしょうか？」って、父が聞いたんです。そしたら、「し

ばらく治療されたら、大丈夫ですよ、よくなりますよ」って。小笠原先生はそういう答えだったです。病名は言われない。「らい」っていう言葉は使われなかったです。でも、「らい」ってわかりましたよ、小笠原先生の答えで。

もう、みんな感じることでですけど、脳天を叩かれたような、そんな感じ。頭の中が真っ白になった。時間が止まったっていうような、そんな感じだったですね。

私、〔旧制〕中学校のときにずっと取ってる雑誌に、長島愛生園のことが書いてあったです。80人か100人ちかくの看護婦さんがダーツと並んで、大きなマスクして、足みたら、袋足袋（ふくらたび）のような、白い布（きれ）で覆いかぶさっている。こんなに嚴重にしなきゃうつるのか、そんなひどい病気か、と。なんか、恐怖を覚えるような、そんな記事を読んだことがあります。そういうわけで、知ったわけですよ。

この病気は治らない。だんだん病気が重くなっていくんだなあ。行く末はない。死んでいくんだと。そんな感じですよ。おおかたが、みな、そうじゃなかったんですか。

ある入所者（男性、1944年多磨全生園に入所）は、1944年、19歳での繰り上げ徴兵検査のときに病気を指摘され「兵役免除」となり、村じゅうに知られるに至った経緯について、つぎのように語った。

19歳で徴兵検査。わたしたちは最後の徴兵検査を受けた年齢なんですよ。戦争が破局的な状況にあったもんで、大正14年〔生まれ〕は繰り上げになって、13年〔生まれ〕の人たちと同じにね、1年に2年ぶん、徴兵検査をおこなうってわけですよ。まあ、ぎりぎりの身長かなあというふうには思いながらもね、それでも合格すれば、どっかへ送られて、たぶん名誉の戦死するだろうっていうようなね、そういう計算を自分ではしてたんですよ。でも、徴兵検査っていうものはね、結核と、それからハンセンの、チェックっていうのはものすごく厳しくて、それで、その日、わたしの同級生であるとかね、1級上の者であるとか、2年ぶんの知り合いの者たちのなかで、わたしと、それから、わたしの部落で級長までした男が、結核で、試験場でマスクかけさせられて。わたしは、マスクかけろとは言われなかったんですけどもね。でも、兵役免除だということで、全部検査が終わるよりも前にね、早くに帰されたんですよ。

そういう状態で帰る道すじでね、〔じつは〕わたしのうちは、そういう病気の人が出たんですよ。——療養所へ入ったときなんかね、わたしならわたしの病気がどこから伝わってきたのかっていう、その道すじをね、かなり厳しく詮索するんですけども、わたしが入園したときには、医務課長がかなり厳しくそれを追求したけれども、ついに、やっぱ、うちの恥みたいな感じがしていますのでね、言わずにしまって。だから、まずあんまり人にはね、おれのうちはそういううちだったんだっていうようなことはね、話してないですよ。

だから、兵隊に行って死のうかって考えたくらいだから、はねられたらね、もう、ほかにどうしようもないんだから、途中で鉄道の線路もあるし、飛び込むなりなんなりすればいいだろうっていうふうに思ってもね、なかなかできない。それで、やっぱり、うちへ帰ってね。まだ、19つだったって子どもですよ。そしたら、親父が……。うち

の病気であった人っていうのはね、父親の弟、[わたしの] 叔父さんだけれども、ずっと病気でね、うちにいた。所帯もつとかそういうことでなしにね、叔父さんにしてみれば、生まれた家にずっとね、病気でもってそこに焦げついているっていうようなかたちであったわけですよ。で、あんまりは覚えてないけれども、亡くなって、棺桶へ入れるときの様子をね、ちらっと見た記憶が残っていてね。

それで、うちへ戻ってきて、当然、親は「もう終わったのか？」って言って。前の晩、もう徴兵検査となれば一人前だっていうことで、ビールついでくれたりなんかしてね。そういう日を迎えられたっていうことを喜んで、それで翌日、朝、送り出して。で、途中でもって帰ってきたから、親父は当然驚くわけで。それで、「なんだ、もう終わったのか？」って言ったのにたいしてね、「いや、おれはタケちゃんみたいな病気があったんだあ」——タケちゃんっていうのは叔父さんだよ、そう言ったら、親父はもう、とっさにわかって、それで頭かかえてね、「ああ、おれの人生、もう、終わった」って言ってね、それで納戸（なんど）へ入っちゃってね、自分で布団ひいてね、寝込んでしまったね。でも、わたしは、遅い昼飯を食べてね、お茶づけかなんかにしてね。五郎八茶碗（ごろはちぢゃわん）のなかへ、涙がぼたぼたぼた落ちたけども、それでも、がつがつ食べたね、ご飯を。

それが、その日のことであって。だけど、ほら、同級生やなんか徴兵検査を一緒に受けて、わたしが早くに兵役免除になって帰されたっていうことであるから、もう、村じゅうすべてに知れ渡るわけだけれどもね。だから、うまく結末がつけられるだろうっていうふうに思ったのが、目算がはずれて。ほとんどもう、村のひとりひとりにね、徹底的に、この事実を教えてしまったっていうような、そういう結果になったわけですよ。で、おふくろに親父が指示した、「日赤へ行け」ってね。で、翌日、日赤へ行って、日赤の診察を受けて、日赤から〔多磨〕全生園への紹介状を書いてもらって。だから、親父はたぶんその紹介状を読んでるんですよ。封を開けて読んでると思うんですけどもね。けども、はっきりと、「おまえはらいなんだ」ということを、直接言われたっていうことはないわけですよ。そういうふうなかたちで自分で悟っていく。

つづけて、この方は、「患者狩り」のお先棒を担いだキリスト教会の牧師の「入所勸奨」を受けた経緯について、つぎのように語った。

そのうちに〔＝徴兵検査でハンセン病と診断されたのちに〕、飯野十造（いいの・じゅうぞう）っていう人が——飯野十造っていう人は、プロテスタントの牧師で、静岡市に其枝（そのえだ）教会っていう教会があって、その牧師なんですけれどもね。その牧師が、白い消毒着を着た医者をつれて、夕方来ましたね。それは、どんなかたちであれ、どこそこらにらい病の患者がいるぞという噂が飯野牧師のところへ集中するようなシステムになっていたんだらうって思うんですけども。飯野牧師が、だいたいあのへん一帯、ものすごい感度のいい情報網をもっていて、そういう噂を聞くと、ただちに外向いていって、全生園なり、長島愛生園なり、地元の御殿場の駿河療養所なりにね、入所を勸奨し、それで入所の日が決まれば、連れていくというね、そういうことを手広

くやっていた人です。これはほんとに、有名な人なんですよ。最終的にはそれでもって藍綬褒章って勲章もらったほどの人です。それで、その飯野さん、白い髭をこんなに長くのばした人が来て、それで、結局、[わたしを療養所に入れるのがよいと考えていた] 親父とは話が合致するわけね。結局、日赤で紹介状ももらってるわけだしね、「飯野さんが連れていってくれるっていうんだったら、ぜひ、渡りに船でお願いします」っていうようなね。ふつうですと、飯野さんのようなお先走りのないところではね、うちにいつまでもいて、結局、警察やなんかの手をわずらわすっていうか、強制収容されるっていうようなかたちになるんですけれども、うちは、それよりも前にね、飯野牧師によって[ここへ] 来たんですよ。だから、うちの親父は、飯野牧師には感謝して、亡くなるまでね、季節季節の、畑、田んぼの生産物をね、「神様にあげてください」って、必ず届けて、最後まで届けて、ありがたがっていたんですけれども。

たまたま、わたしのように徴兵検査でね、村に全部わかってしまったっていうケースだからね、「渡りに船」になるんですけれども。ひた隠しにしているところへね、白い予防着を着た医者連れて訪れると、たちまち、近所の好奇心の的になっちゃうわけですよ。で、たいへん迷惑がられて。おなじ静岡[県]でもね、飯野牧師にそういうふうを訪ねられて、それは掛川のほうの、もう、おじいさんで。いつごろからかはわからないけれども、左の手の指が、こっちの第4指、5指あたりがね、すこし曲がってるぐらいの人で。そういう神経らしい人はね、それはそのまま病気が固まってしまって、なんの治療をしなくっても、そのまま一生を終るっていうケースが多いんですよ。だけでも、それがハンセンだってことを飯野牧師が嗅ぎ付けて、それで医者つれて訪問して、「入れ、入れ、入れ、入れ」って言って、結局、連れてこられるんだけど、ほっておいたってもう、年だからね、死ぬんだと。だけど、そういうふうなかたちでね、近所中ふれまわるようなかたちになってしまったからね。残る家族だって、たいへんな差別やなんかを受けることになるし。それから、[そのおじいさん] 本人は、[飯野牧師が] たまたまプロテスタントの牧師であったから、この[=多磨全生園の] 中のプロテスタント、秋津教会の、三角梯子のような感じの鐘楼(しょうろう)があって、「その鐘楼へぶらさがって、死んで祟(たた)ってやる」って言って、自殺したんですよ。

そういう人もあったし、それから、乳飲み子を抱いたまま、送られてくる特別列車を「御召列車」っていうけれども、御召列車でもって、ずうっと泣いてきて、それで、全生園へ来たら、医者が診てね、「まだこのくらいだったら、この子もいるんだし、きょうは帰ってもいい」って、帰された人がいるっていう。[その女のひと] 御召列車でたまたま一緒になった人が、そういう人がいたっていう話をね、してくれたことがあって。静岡から来た、去年亡くなったOさんっていう人がね、「わし来たときに、そんなことがあったよ」っていう話をしてくれたけれども。

とにかく手当たり次第、飯野牧師がね、静岡県は、みんな送りこむってことをしたわけですよ。だから、静岡の飯野っていえば、もう、ほんとに、有名だったんですよ。それは、評価だけでなしに、悪名高いついていうのでも有名な人だったですね。

ただ、わたしは、彼に連れてきてもらってね、親父と一緒に普通の列車に乗って。[わ

たしは] まだなんともなかったからね、そのころは。親父は、自分の弟の病み崩れていく姿を見ているはずだけれども、でも、ここへ送ってきたときにね、門を入れて収容病棟のところへ行くまでのあいだに、入浴のために風呂へ行く不自由な人たちとすれ違ったんですよね。風呂へ行くから、薄着になって、バケツを腕に下げてね、それで、杖ついてね、石の道を浴場へむかって、次から次に行くでしょ。地獄を、いきなり見たような気が、親父はしたんだろうと思うんですよね。だから、一生、「おれはおまえをあそこへ捨ててきた」ってね、一生負い目に思ってたみたい。

ある入所者（男性、1945年栗生楽泉園入所）は、「未感染児童」として保育所で過ごしたあと、発病して栗生楽泉園に収容された経緯について、つぎのように語った。

わたしが生まれたのは長野県なんですけど。昭和15年、5つのときに、湯之沢にきましてね。湯之沢に、両親といたことがあるんですよ、2年ほど。そのあとね、湯之沢が解散になって、両親は病気だったんで、ここ〔＝栗生楽泉園〕へ入るんですよ。わたしは、病気じゃなかったんで、そこに保育所ってのがあったんですけどね、そこに〔昭和〕17年の5月から20年の2月まで、いるんですよ。だいたい、19年の暮れごろに病気がわかったんですよ、自分ではね。で、20年の2月の17日に、ここへ入った。

なんか、ここんこ〔＝左太腿〕、足の感じがなくなったのがわかって。で、けっきょく、みんなが「病気だ、病気だ」なんて言うんでね。ああいうのは、もう、すぐわかっちゃうんですよ、子どものなかだっけね。集団でいると。

保育施設ってのはおもしろいところでね、施設ですからね、けっきょく、なんていうの、喧嘩して順番ができるんですよ。いちばんのボスから、ずうっと、こう、順番があるんですよ。だいたい、俺よりこっちのほうが弱いとかなんとかって、順番があるのよ。その順番がね、崩れてくる。けっきょくね、みんながね、白い目でみたりすると、まともに喧嘩することできないからね。そうなると、順番がさがるんだよ。

それと、やっぱし、風呂に入るのが嫌でね。当時、困った。みんなに見られるような気がしてね。一緒に入れなくてねえ。なんか、虱（しらみ）がわいてひどい目にあっただような覚えがあるけどね。あれだけは、ひどい目にあっただ。保育所にはね、この温泉がいつても、温泉だから、いつも、出てんだよ。出てるって、昼間、入るわけにはいかないのよ。何時から何時までは何の時間って〔決まっていたから。〕風呂へ入るのが、なんていっても、いちばん困ったなあ。まだね、ここらへんに白い斑紋が1個あったくらいだからね、どこがどうってことはないんだけど。

〔楽泉園に移ったのは〕ああいうところには、「お母さん」っていう人がいるんですよ。いちばんの親方の保母さん。わたしなんかがいたときは、岩田たまさんって人だったけど。「明日、行くよ」って、言うわけさ。それはもう、絶対だからね。「明日、行きなさい。用意しなさい」って、こう言われればね。理由なんか説明しないよ。だいたい、わかるから。

ある入所者（男性、1947年邑久光明園入所）は、1947年、18歳のときに、執拗な入所

勸奨を受け、言うことをきかないと「進駐軍が連れに来るぞ」とまで脅されて、「御召列車」で呂久光明園に收容されるまでの経緯を、つぎのように語った。

いちばん最初、胸のところに、タムシみたいな赤い斑紋が出たわけやけどねえ。その当時、ハンセン病自体がわからんから、なんでこんなんができたんやろおって気持ちでおったわけ。尋常高等小学校2年の、15歳のときですかねえ、学校の身体検査のときに、校医が、「なんや、こんなところに、こんなんできとるなあ」いうて言われてね。で、「調べる必要があるんじゃないか」とか言うてね。校医自身は〔ぼくがハンセン病だと〕知っておられたかどうかはわかりませんがね。「いっぺん他の病院行って診てもらえ」って、親にそういう書類を渡してっていうことで。で、まあ、たいしたことないし、べつに行くことないわいってね、なかなか行かんかったけどね。「どんなんや、まだ行ってきてないやろう」っていうようなかたちで言われて。もう卒業間近かなあ。県病院へ行ったわけやけど、県病院でも、「名古屋の大学病院へ行け」言われてね。

それで、わかってね。パンフレットみたいなのくれたわけよ、大学病院で。それでも、ぼくら、ライっていうような病気、そんなもん、どういう病気やろっていうようななんでおったわけね。で、まあ、「こうこうこういう療養所があるから、そこへ入ったらええ」とかいうて、書類に書いてあったわけやねえ。そんなもん、ぼくは、ほかしてもうたわけやね。

で、学校卒業してから、ちょっとこう、手にもなに〔＝斑紋〕が出たから、ああ、これはまたいっぺん病院行ってなにする必要あるのかなあ思うて、また名古屋の大学病院に行ったわけやけどね。で、薬、飲みいうてね、病院でいただいて。むかしの薬やからね、大風子いうてね、飲み薬をくれたわけやけどね。油みたいな玉、そんなん飲めないからね、買うて持って帰ってきて、みな捨ててしもうたわけやけどね。飲まれんから。それで、戦争がだんだん激しくなましてね。ぼくは、病院行ったり行かなんだり、何回も行っていないですわ。

従兄弟と一緒に、近くの鉄工所へ行っったわけやね。で、〔昭和〕21年の、もう秋やったわね。ぼく、田んぼへ行っったわけやね。だったら、妹がね、知らん人を連れてきてね。で、なんかなあ思うてたら、「わしは県の職員や」いうてね。「隣村に、らい病の人がおる。岡山の病院へ行くから、一緒に行かんか」っていうから、ぼくは「そんなとこ行かん」いうて、その人に断わったわけやね。

で、〔昭和〕22年の正月すぎで、いわゆる担当官がまた来るし、警察も来ました。で、「ぼくはそんなとこ行かん」っていうとるから、「そんなこと言うとなら、進駐軍が連れに来る」って、こう言われましてね。で、まあ、2、3回、警察とか担当官が来ました。ぼくが「行かん」言うからね。そうになったらやっぱり、田舎のことですからね、隣近所がね……。警察が、むかしのサーベルっていうんですか、そんな格好で出入りしとるからね。「ああ、なんか、あつたんやろか。どういふようななにやろ」っていうような、ねえ、隣近所の人が、不審に思うわね。で、県のかただって、県の車で来るでしょ。ぼくらのほうの田舎いうたら、自動車を見るいうたら、もう、冠婚葬祭ぐらいのときぐらいしか、自動車ってないわけやね、見る機会がね。それに、警察は行くわ、県の自動車で職員の人が行くわっていうような、なにかあるんやないかっていう

ようなことで、なんていうんか、どういようなツテでわかったんか知らんけど、「その息子は病気や」っていうようなかたちでね、わかったわけやけどね。で、また、「行かん、行かん」言うもんやから、「進駐軍が連れに来る」っていうようなことを言うからね。それで親もびっくりしてね。そんなもん、進駐軍が来てやねえ、ジープとかそんなんで連れてかれたらやね、それこそ、近所にはね、そういうようななにでっていうようなことになるから。だったらもう行かなしょうないんかいうことでね。で、「岐阜の駅まで何時なんぼに来い」いうことで、ぼくは親と一緒にね、岐阜駅行ったら、やっぱりね、同じような人が。ぼくら5人、同じように収容で来たわけやね。

そのころやったらいわゆる「御召列車」とかいうてね、一貨車、借いきて、担当のかたと、あれ、保健婦か、事務をしておる女の子かどうか知らんけどね、と来て、ぼくらは5人一緒に一貨車で。県が借いきつとるんやろね、あれ。で、途中の駅でね、まあ、そら、「患者輸送」かなんか貨車の横に書いてあったと思うわけやけどね。ところがその、なかなか、なんていうんかな、汽車に乗るのにね、一般のかたはたいへんやったと思うわけやね。乗ろう思うても、ようけ混んどったりなんかしてね。で、とにかくうちの貨車へね、駅ついたら、みな乗ってきよう思うわけやね。よけい、すいとるから。「患者輸送」とかなんか書いてあったとか言うてましたけどね、そんなもん目に止まらんのとちがうかなと思うわけやね。「わあ、この貨車、すいとるからここへ乗ろ」っていうなかたちでね、乗りに来る人が、もうほとんど駅ついたらおったわね。だけどもあ、じつはこうこうこうや、うつらい病やからっていうようなかたちでね、全然乗せなかったけどね。

で、夜行で来るから、岡山へ朝ついて。で、岡山駅で、ジープを改造した車でね、みなそれで患者輸送しとったわけやね。ここの光明園の車やと思うわけやけどね。それに乗せられて、ここへ着いたわけやけどね。

ある入所者（男性、1947年邑久光明園入所）は、子どものとき「トラックの荷台」に乗せられて収容されたと、つぎのように語った。

その病気〔＝ハンセン病〕やって、あの、ぼくだけちゃうからね、なっとるのは。きょうだいも。ここ〔＝邑久光明園〕へ、そやから、一緒に来た。もう何回も、「ここへ入れ、入れ」て、〔入所勧奨に〕来たと思うで。県のほうから。せやけど、親父が、行かさんかったっていうかな。ちょっと記憶は薄れとるけど、そうやと思う。で、何回目かに、朝早くかな、もう行かなしゃあないということになって、朝早（はよ）う、トラックの荷台に乗せられて来たのを覚えてる。おれは、連れられて来たちゅうことや。自分の意志で来たんとちゃうから。どっか遠足でも行けるわ、ちゅうような気分やったもの。せやけど、えらい朝早う、トラックの荷台って、おかしいなとは思ってたがな。

こういうとこ〔＝ハンセン病療養所〕やとは全然思わなかったわな。あるとも知らんかったしな、こういうとこが。

ある入所者（男性、1948年栗生楽泉園入所）は、自分は療養所に「自発的に入った」と

言明した。草津の湯之沢での療養生活の経験もち、湯之沢解散で帰郷していたが、病状の悪化により、1948年、20歳のときに、みずから栗生楽泉園に向かったというのだ。

〔おれは〕自発的に入ってきたんさね。湯之沢でもって〔暮らしたことがあるから〕、いちおう、ここ〔＝栗生楽泉園〕を知ってたし。このなかに、だいたい、自分の知ってる友だちやなんかみな入ってるし。まあ、道順も知ってるしね。ただ、ここへ入れば、こんだ、もう出してもらえねえんだぞってことは承知だったけどね。そら承知けど、この病気のせいだからしょうがないしね。当時の国の癩予防法的な対処なんだからね。もうある程度仕方ないんだと。小遣いが一銭もらえるわけじゃないし、なんかしら作業しないと……。おれが入ったころから、慰安金てのがあったんかなあ。たしか、いくらもらったような感じがするわな。とにかく馬鹿にしたような低い額だったよね。それがしばらく続くんだよね、〔昭和〕23年に入って。

おやじがあとで言うのには、もうちょっと新潟医大に近くて、通えれば、治療できたんだと。で、ここへ入ってから聞けば、新潟医大へ通ったって連中、何人もいるものね。おれはもう、ほんとのこっち、長野の県境のほうに生きてるんだからね、とてもそこまで通ってなんか行けっこないし。

しかし、「自発的入所」というこの入所者のばあいも、栗生楽泉園に向かう途中、草軽電鉄の乗車拒否にあい、さんざんなめにあった経験をしている。

おでこと鼻の頭にね、急性結節。おれたちは「熱こぶ」って言ったんだけど。おでこのやつがパンクしちゃってね、膿が出るんさ。そんな、しょっちゅう出てるわけじゃないけれど。それは、帽子かぶれば、いちおう隠せるんさね。鼻の頭は、うまくねえんだいねえ。いまほど鼻ぺちゃんこじゃなかったから、まだ。あのころはね、雑誌を丸めてね、顔に、こう、あてながら、隠しながら。そういうかっこうで、それで、帽子をかぶってさ。『ラッキー』とかなんとかつった、薄い本だったんだいね。いまの週刊誌みたいなもん。それを丸めて。で、こっち来るのに、軽井沢ではねられちゃったわけさ。乗車拒否よ。改札員から「あんたは、乗車しないでください」と。軽井沢に、通称「峯公（みねこう）」っていうのがいて、これ、病気に明るいもんだから。どうもその人だろうと思うけど。で、乗車拒否だもん、乗れねえんさ。それで困るっていうと、その人がまた、なんだか、ほんとに泣きついていくってえと、旅館を案内してくれたりなんかもしたらしいんですよ。で、まだ20歳（はたち）だもの、おれ。泣きつくことはねえやねえ。切符、もう、改札もしてあるんだいね。改札もしてあったんだから、そのまんま、峯公が行っちゃったら、その後からひょいっと走って出ていっちゃえばよかったのに、もう、気がひけてるから、その切符を持ったまんま、先の駅へ……。もう何回か、その草軽電鉄には乗って、うちへ行ったり来たりしてるから、勝手はわかってるんさ。先まで行って、先で乗ればいいやと、そういうつもりでいたの。考えとしては、大変いい考えだったんさ。そしたら迷子しちゃって。それから、とんでもない、信越線のほうへ出ちゃって。線路づたいに歩けばいいんだと思ってね。だけど、この線路、電線がはってねえけどおかしいなと思いつつながら。沓掛のほうへ向

かって歩いちゃったらしいんですよ。また、その道、引き返してきて。それで、こんだ、つぎの駅まで、また長いんだわ。暗くなっちゃってね。電鉄のところどころに、番線はってあるんだよね。それにつまづいてさ。しょうがねえから、線路のなかに入っちゃって。歩いて。もう一晩、ここらで野宿して、あしたの夕方には草津へついでだろうと、そう思ってたの。で、駅員がまだいるから、駅員がいなくなったら待合室で寝れば良いと思って。そこで一晩野宿して、翌朝早く出て、夕方には草津へ行く予定だったのが、夕立にあっちゃって。とてもじゃねえが、歩けなくて。雨宿りして。少し小降りになったから、もう、早く草津へ行きたいんだいね。だから、谷所（やとこ）ちゅうところが確かにあったわけなんだけど、まだそこまで来てねえから、まだだなあと思って。前の晩みたいに、夜暗くなってから歩くのやだから、早目に、どっか野宿しようと思ったら、新しく建てたうちがあつてね。大工さんがまだ、壁板なんか張ってたけど、そこで、「一服さしてくんない」って、ちょっと雨宿りさしてもらって、いつまでたってもおれ動かねえもんだから、「おい、どうするんだよ」ってことになって。「このへんに旅館あるかい」って聞いたたら、「ねえ」ちゅうわけだよ。「じゃあ、悪いけど、あしたの朝早く、おれ、出ていくから、それまでここへ置かしてくんない」ちゅうことで、「火だけ気をつけろよな」ちゅうことで。煙草はもう、どっかへ落っこしちやっついてないし、ライターの火は全然つかなくなっちゃってるし。いまのライターと違ってねえ、むかし、オイル入れて、1日分ぐらいしかもたなかったんだもんね。もう、火もない。煙草も吸いたいけど吸えない。足は、パンパンに腫れちゃって。足の裏、まるっきり、摩擦、水泡の皮むけちゃって。惨めなもんさね。それで、こんだ、こんなに足が腫れてるんだけど、むかし、敗戦になったときの、軍隊の払い下げの、編上靴（へんじょうか）とかなんとかつていう革靴、それに、むりやり足突っ込んでさ。10分も歩いたら、もう、谷所じゃねえの。谷所来りや、すぐ草津なんだいね。ゆうべのうちにちょっと我慢すりゃよかったなと思ったけど。

ちなみに、前出のある入所者（男性、1939年多磨全生園入所）は、1951年に、園の許可を得て、転院のために多磨全生園から駿河療養所へ移動中、横浜駅でひどい取扱いを受けた経験を、つぎのように語る。乗車拒否というものがどのようなものであったか、前の話と関連するので、ここに掲げておく。

〔兄が多磨全生園で亡くなったあと〕わたしは、兄貴の遺志をつごうとして、「駿河療養所へ行きたい」と。で、正式に許可を取って。そしたら、患者を移送するという事について、多磨全生園は、本当に、いい加減でしたね。わたしに転院の許可を与えながら、患者輸送をね、神父さん——神山復生病院に、多磨全生園に来てキリスト教の布教やなんかをやっている神父さんがいて、その神父さんが神山復生病院に行くときに、わたしを乗せていくと。それで、それが明日だというんで、友だちみんな集まって一杯飲んで、送別会やってたの。そしたら、連絡があつて、その神父さんは、じつは北海道に行つて、きょう帰るわけだったけど、北海道でジープが故障して、ダメになったと。だから、当分、見送り、という連絡が施設側から来たの。

そりゃあ、ねえだろう、というんで、それで、翌日、わたし、友だちに送ってもら

って、東海道線に乗って、御殿場に行こうと思ったの。そしたら、横浜で降ろされちゃったの。降ろされちゃったというのは、わたし、もう疲れてて、眠ったんですよ。そしたら、顔やなんかむくんでたというか、症状が出ていたから、それで、ハンセン病のことを詳しく知ってくる人が、おそらく近くにいたんでしょう。で、横浜駅に着いて、わたしはぼんやりしてた。わたしのまわりに人がいなくなっただよ。大勢いた客が、わたしのまわりだけいないわけ。変だなと思ったら、鉄道公安官が入ってきて、「降りてくださいよ」って言うわけさ。「なんで？」ついたら、「あんた、病気でしょう？ 降りなきゃだめですよ」なんて、降ろされちゃって。そしたら、昭和26年だから、まだ、横浜駅構内に、戦災浮浪児というのが大勢いて、そういうのが、わたしのことを聞き込んだのが、「おーい、らい病が捕まったってよお」なんてさ、言うのが聞こえるの。「おい、あいつだ、あいつだ。あいつ、らい病だってよお」なんてね。

その鉄道公安官に連れられて、駅の、変な空き地に連れていかれて、そこへ莫塵（ごぢ）を敷（ひ）かれて。で、線を描いて、「ここから出るなよな」なんて言われて。ハッハッハッ。そこで一晩、露天ですよ、莫塵の上で過ごして。それで、「どうして〔療養所から〕出てきたんだ？」って言うから、わたしは、「駿河療養所へ行くんだ。療養所は、わたしが行くのを知ってるんだから、療養所に連絡してください。で、療養所から迎えに来てもらってください」と。連絡を取ったら、「そんなのは知らない」って、駿河療養所の施設が言ったんだ。面倒なことに、かかわりたくない。それで、その翌日、送り返されちゃった、多磨全生園に。

それで、2、3日したら、「おい、新聞に出てたぞ」なんて言われて。わたしの名前、本名を1字変えただけで〔新聞に出ちゃった〕。「お父さん、なんて言うんだ？」おれ、〔そんなことになるとは〕知らないから、みんなしゃべっちゃった。「お父さん、こういう人です。こういう名前です」「うちは、どこにあるんだ？」「こういうとこです」。そしたら、番地をちょっと変えるだけで、父の名前も1字変えるだけ。わたしの名前も1字変えるだけ。それだけで、「癩患者、列車内で捕まる」という記事になった。ビックリしましたよ。

ある入所者（男性、1949年栗生楽泉園入所）は、発病から収容までの経緯について、つぎのように語った。

27、8〔歳〕、戦争の始まるちょっと前ですね。右足の親指の裏へ傷ができた。最初、1円硬貨ぐらいの小さいのができてね。それ、痛くないんですよ。これはおかしいなあ、と思っていたんですけど。それ大きくなって、10円硬貨ぐらいか。それでもう、これじゃ仕事できないと思って、地方の医者をずうっと歩いた。でも、どこへ行っても病名を言ってくれないんですよ。面倒くさいんですよ。言うと、あと、病院自体を消毒されるのが。

だから、病院はね、ずいぶん歩きましたよ。それで、最後に行った先生が、年寄りでしたけどね、「帝大へ行って、診てもらいなさい」って、紹介状を書いてもらって、それで行ったんです。2週間くらい経ってかねえ、〔東大病院の〕先生に、「あんた、ここに何の病気で来てるか知ってますか？」って言われたんですよ。ぼくが「いや、わ

かりません」って言ったら、「あなたの病気はらい病ですよ」って言われたの。そうしたら、血の気がさーっと引いちゃってねえ。らい病ってのは怖い、ってことは意識してますからねえ。で、うちの親戚、身内でもねえ、この病気出た人がいないんですよ。だから、余計、たまげたね。

〔じつは〕うちの上のほうにね、1軒そういう家（うち）があって、そこのうちの病んでる人はね、小さい小屋を作ってね、そこへ入れとかれてたんですよ。それで知ってるんですよ。だから、俺もあの病気かなあ、と思って。それを言われたから、余計がっかりしちゃってね。〔世の中〕もう真っ暗ですよ。

それで、「療養所へ入るか、帝大に通うか」って言われたんです。だから「通います」って、1年くらい通ったんです。〔当時は〕週2回、大風子を打つだけです。足の傷、だんだん大きくなるけど、全然治らないんですよ。これじゃ、どうなってもいいぞって、やけくそみたいになってね、それでもう、行くのやめていたんですよ。

それから1年くらい経ったら、今度は、保健所から来たの。帝大へ行かないもんだから、保健所へ、通知したんですね。保健所から来たのが、終戦後で、〔昭和〕23年かな、4年になってたかもしんないね。それで、今度は「療養所へ入ったほうがいいだろうから」つって。それで、全生園に入るわけだったの。ところが、全生園がいっぱいね、入れないで、それで、ここへ入ったの。来るときは、2人で来ました。もうひとりの人と。年寄りの、おじいさんと。別の村だけどね、その人も全生園に入れなくて、こっちへ一緒に来たの。

〔栗生楽泉園に来るときは、保健所の人が〕ついてきました。トラックで来ました。トラックに、幕を張っちゃってね。あ那时的トラックは、ありや、木炭車でした。〔幌を〕開けりゃ、外の景色は見えるんですよ。だけど、落ち込んでいたから、外なんか見る気はなかったですけどね。朝は早かったですね。朝6時ごろ、もう村を出たのかな。ここへ来たのが昼過ぎだから。

〔保健所から「療養所に入りなさい」って言われたときは〕かえって、よかったと思って入ってきました。もううちにいても仕事はできないしね。家族にも迷惑かけるだけだから。それで、「治ってよくなれば帰れるし」なんて言われたからね。それならいっそのこと、行って、治したほうがいいと思って。それでこっちへ来たんですよ。

〔「治療すれば治るよ」って言ったのは〕保健所だったか役場だったか……。そりゃ、だますつもりで言ったかもしれないんだよね。〔自分にも〕治したい気持ちはあったけどね。治るとは思ってなかったですね。で、ここへ来たら、自分よりか悪い人がいっぱいいるんで、これに驚きました。

そのころは裏傷ぐらいでね、よかったんですよ。〔昭和〕24年、34歳で、ここへ入りましたから。

ある入所者（女性、1948年栗生楽泉園入所）は、療養所に収容されるに至った状況と、入所後「薬を飲まなくなつて30年、40年たつ」という経緯を、つぎのように語った。このひとの語りからは、強制隔離撲滅政策というものが、長期にわたる「収容＝隔離」がまったく不要であったひとさえも、終生隔離の対象としてしまったことを読み取れよう。

小学校6年生のときに足の太腿に赤い紋ができて、町医者へ行ったら、「タムシだろ」ってんで、もらってきた薬が臭い薬でね。でも、それを毎日2、3回塗って。小学校6年生のときは、まあ、斑紋程度でおさまってたんですよね。

高等科2年卒業してから、だんだんだんだん、その赤い斑紋が広がってきて、足から今度、胸のあたりへ出たり、背中へ出たりして、こりゃあおかしいっていうんで、保健所へ行って診てもらったんですよね。保健所で、「大学病院行ったらいいだろ」って、上野の大学病院へ通ったんです。

大学病院行ったら、「ちょっと、こっちへ」なんて、受付の人が案内して、別の部屋へ行って、裸になって。[娘だから恥ずかしかったけど]お医者さんの前だから、しょうがない。裸になったら、胸やら背中やら手やら足やら筆でなぜでね、「わかる？」やっぱり、手や足が、もういくらかそんなとき、悪かったですよね。曲がってなかったけど、神経が筆でさわっても鈍かった。針でちくちく[しても]、感覚がね。

大学病院通ってるころは、あたしもまだこの病気ってわかんない。で、大学病院通って、近くに保健所ってあるでしょ、保健所へ呼ばれた。どっからか話が伝わったんでしょね。あたしのお父さんは[しばらく前に]亡くなってたから、「お母さんとふたりで一緒にいらっしやい」って。あたしは話聞かないで。あたしの母親は聞いてびっくりして、青い顔して出てきたから、「お母さん、どうしたのよ」ったら、「こういう病気だ」。親戚にこんな病気[の人が]いたかしらって、調べられるだけ調べたけどいかなかった。それでだんだん、役場のほうの手続きで、収容のかたちで来たけど…。最初は昭和の23年の春ごろ、全生園に役場が手続きしてくれたの。[しかし]全生園でね、[入所者が]それこそ1,000人以上超えてるんで断わられたの。で、「楽泉園どうですか」って役場から手続きしてくれた。

[ここに入所したとき]あたし、[外から]見てもなんとも悪いとこなかった。あたし、顔になんにもできなかつた、体にぶつぶつもできなかつたから、ありがたかったです。

[ここに来て]10年たっても20年たっても、あんまり変わらないですよ。おかげさんでね。来たときは、5年や10年……。もう何十年も菌検査しても出ないから、本病の治療なんにもいっさい、薬も飲んでない。もう薬も飲まなくなつて30年か40年たちますかね。来たときは、5年や10年は続けましたよ。注射の方もいたけど、あたし注射打つとどうもプロミンが反応があつてね、かえって打つたあと気分が悪くなる。で、先生が「それじゃあ、飲み薬がいい」って。

おかげさんで、医局へもあんまり診察へ行くことないし。[看護婦さんも]「〇〇さん、あまり医局来ないね」「[でも]医局来ないんが一番丈夫な証拠だよ」なんて。

ある入所者（男性、1949年栗生楽泉園入所）は、自分は収容されてから、療養所でハンセン病の治療を受けたことはない、と声明した。このひとのばあいも、まったく無用な「収容＝隔離」だったと言えよう。

このひとの語りは、療養所に入所してはじめて自分がハンセン病だと知ったということから始まった。

わたしは、23〔歳〕で、楽泉園に入るまで、自分はハンセンであることは知らなかったんです。それで、ここへ来たら、楽泉園の正門入るときに、それこそ門柱に「国立癩療養所」って入ったんだよ。その「癩」をみて、「あれっ、おれはらいだったのか」って、そう思ったわけ。

そして、発病の時点を想起する話にもどる。

わたしはね、昭和16年の8月26日の朝、目を覚ましたら、右手が、自由がきかなかったの。だから、始まりというのは、そういうことから始まったと思うんだけどね。「らい」ってのは、いっぺんに急激にくる「らい」っていうのがあるかどうかかわらんけども。とにかく、わたしは、急激にきた。一晩できよったんだから。

下呂温泉などで湯治をしたが、効き目はなかった。

そんときに、Tっていう病院へ行って、診てもらったら、「うちでは、これはなんだかって決められん。Uっていう医者があるから、そこへ紹介状書いてやるから行ってこい」つって言ったの。それで、Uの医者へ行ったら、もう、玄関あけて入るなり、「うちにあがらんでくれ」っていうんだ、医者がね。「あんたのことはわかったから、もう、いいから」って。それでもう、それきり、医者の方は縁切りになっちゃった。

〔病名は〕言わない。〔ただ〕「うちへは、あがっちゃいかん」って言うんです。だから、おかしいのは、おかしいんだけども、おれも知識がないから。

〔そして〕長野県庁のほうから、わたしが「らい」だつてことで、村のほうに連絡がたって……。U医者のくちぶりからして、Uが県のほうに報告をした〔のではないと思う〕。それで、ここ〔=栗生楽泉園〕に、宝木原（ほうきばら）って先生がいたんですよね。その先生と県の職員のひとつが、村まできたの、わたしを調べにね。

そんときに、妹も一緒に呼ばれたんだけども、妹は、「この問題については、兄ちゃんの問題であつて、わたしには関係ないことだから、わたしは帰ります」って、先に帰っちゃったんだ。だから、あとは、わたしひとりで、先生に診てもらったんだけどもね。そんときも「らい」つうかなんだということは一口もでなかった、先生の中から。ただ、「草津へ行け」つて言われたんだよね。〔それが昭和〕18年。で、そんとき、〔草津の栗生楽泉園へ〕行けつて言われたけども、食糧難だったでしょ。だから、「こんなときにむこう行つたつて、食うものもありっこないんだから、やれない」つって、延びとつたんだ。

それで、〔昭和〕24年の7月まで、「行け」と言つてこなかった。それで、24年の7月になって、「食糧事情も、ちったあ、よくなつてきたから、草津へ行って、治療してこい」と。「治るんだから、行け」つてことで、それで、来たわけなんだよね。だから、わたしは、楽泉園に入るまで、「らい病」だつてことは全然知らなかった。

〔ここへ来たのは〕完全に、強制収容で。飯田線のKという駅から、貸切の電車〔=「御召列車」〕に乗せられて、それで、来たわけ。〔そのとき収容された患者は〕8人で

す。〔それぞれ〕村〔役場〕のひとが、ついてきてくれたの。ぜんぶの村から、村〔役場〕のひとが乗ったから、だから、8人、患者きたけども、総勢20人くらいで来たんじゃないかな。

で、上伊那郡のTって駅で国鉄に乗り換えて、長野駅まで来たわけ。長野で1泊だから。長野の日赤〔病院〕に1泊したわけ。ひどいんだ、これがねえ。長野の駅、降りたらね、ホームにね、白墨で2本、線が引いてあった。「そのあいだを歩け。はみでちやいかん」って。それで、一般のところ〔＝改札口〕は出られんから、貨物〔用のところ〕から出て。それで、こんどは、幌をかけたジープに乗せられて、日赤〔病院〕へ行ったの。そしたら、日赤は、その時代は、玄関で靴ぬいで、スリッパに履き替えていくのが、常識だったんだよね。で、そこへ行ったら、「あんたがた、特別だから、靴はいたままで、あがっていい」っていうことなんだ。それも変だなあって思ったよ、こっちも。それで、入ったところがね、伝染病棟なんだよ。網が張ってあってね、全然でられないようになってんだ。それで、水道だって、水を飲んじゃいけない。朝になっても、顔を洗っちゃいけない。できるだけ便所はがまんしてくれって。それで、布団は全然ないんだ、泊まるったって。それで、軽井沢まで送ってもらった布団を、また持って帰ってもらって。それで、こっちは寝たわけなんだ。それで、棺を運び出す通路を出て。あとは、信越線で軽井沢まできて。で、軽井沢から草津まで、草軽電鉄で来たわけなんだけれどもね。草津へ着いたとたんに、園の職員が待ってって、消毒するの、電車を。

〔一緒に収容された他の7人の患者さんには、ハンセン病のいろんな症状は〕でてた。だから、そういう人がおるから、「おれはらい病じゃない」って、よけいに思っちゃうんだよ。「らい」っていうのは、あんなになるんだから、おれはちがうなあって。そう思っちゃったんだ。

〔栗生楽泉園の正門の「癩療養所」と書かれた門柱をみた瞬間〕「やっぱり、おれは、らいか」って思ったっていうことは、自分のどっかに、「おれはらいじゃないかなあ」という不安もあったと思うんだね。それで、楽泉園の入ったところに、売店があったわけ。売店の前に立っておったら、分館長が来て、それで、わしは外見がいいから、「ちょっと、悪いところ見せろ」ちゅうんで、こう、手をだしたんだ。そしたら、「ああ、やっぱり、だめだなあ」って、こういうふうに言ったから、そんときに、わしは、「あー、これは、もう、治んねえんだなあ」って、それこそ、ほんと、そんとき、思ったね。

〔収容された昭和24年には、すでにプロミンの治療は〕始まっていた。もう毎日打ってたね。〔でも〕わしは、一本も、打ってないよ。打つ用がなかったんだから。〔ここへ来てから〕ハンセンの治療はしたことはないもん。

このあいだね、ここの副園長のところへね、わし、行って、「わしが本当に病気であるか、ないか、教えてくれ」って、言ったんだよね。そしたらね、「◎◎さんの右手は、ハンセンじゃないよ。ハンセンは、もう治っちゃってるんだよ。これは後遺症だよ」って言うの。わしは、プロミン、打ってないよ。〔ひとりでに〕治っちゃってたんだよ。ここへ来ることなかったんだよ。ところが、政府のほうで強制隔離ってのを決めちゃ

ったから、猫も杓子もってことで、連れて来られちゃったんだけどね。

入ってじきに、小林〔茂信〕先生は、「東京の多磨に、らい研ちゅうのがある。あそこに、血液を10年間保存して検査する方法があるから、それするぞ」って言ってくれたことがあった。それで、10年間やってもらったら、1回も、菌らしい菌がでないと。だから、そのときに、もう、わしは、ハンセンじゃねえなあって、自分なりに思ったの。菌がねえなんてのはおかしいって、自分でも思うから。ああ、おれは、ハンセンじゃねえなあって、自分でわかつとった。だけど、いまさら、ハンセンじゃないなんて言って、出て行って言われたって、生活に困るなあと思って、我慢しとったの。そりゃあ、わしだって、何回も、出よう、出ようとは、思ったけども、ずるずる、ここまでできてしまったんだけどね。だけど、ハンセンじゃないっちゅうか、もうハンセンは完全に治ってるっちゅうことだけは、事実だと、わし思うんだよね。

ほんという、なんで入ったのか、わからない、ここへ。なんで来たんだか、わかんない。

ある入所者（男性、1949年栗生楽泉園入所）は、病気を隠せなくなり、家族のもとを去って、大阪へ向かう途中、上野で警察官に“保護”されて、栗生楽泉園に入所するまでの経緯を、つぎのように語った。

私は〔生まれは〕韓国です。日本にね、親のきょうだいがあったんですよ。〔その人は〕日本人と結婚してて。それが、〔私を〕養子にほしいってわけで、で、おれがなににも知らないうちに、親たちが決めて、で、行けって言われて。〔日本に来たのは〕16ぐらいですよ。〔大阪に来ないかっていう話があって、大阪の工場へ働きに行った。〕

傷をつくっちゃったんですよ、こういうとこへ。会社の専属の病院があつて。行ったらね、傷を診て。治らないんです、いくらなにしても。そしたら、先生の息子が大学の先生で、「〔阪大病院へ〕一回来ないか」と。行ったら、その先生が、「あんた、こういうとこ、痛くあるか」って言われて、「いや、ぜんぜん知らない」。「ひよっとすると、こういう病気〔=らい病〕かもしれないぞ」。「治るか？」ついたら、黙ってたんですよ。……「病院入ったほうがいいんじゃないか」と言われたんですけど、そんな気はないんですよ。仕事のほうが忙しくて。それでずうっと、終戦になるまでやったんだから。兵器工場で、飛行機のね、部品をつくってた。

それ終わってから、家族を頼って行ったんですよ。終戦2年目かな、3年目に、行ったんですよ。それまではね、〔症状が出ていたのは〕ここ〔=左手〕だけ。ここが、神経痛。もう痛くってどうしようもないくらい。

結局、病気がわかったときには、先生がね、うちのことよく知ってたから。うちの商売だと、この病気だとわかると大変だと。だから、言わないと。「家にも言わない。誰にも言わないから、あんただけにわかってもらいたい」と。「もし行くんだったら、療養所を知ってるから、紹介状書く」つた。そう言われたときには、もう、どうでもいいっていう気持ちになっちゃって。いつ死んでもいいって気持ちだからね。それで、帰ってきてからね、しばらく考えて。もう、家、内緒に出ちゃったんですよ。療養所に行くんじゃないで、大阪いたんだから大阪へ行こうと思った。

私はこっち来るときにね、どっかで死にたくて、身分証明になるやつとかね、ぜんぶストーブんなかにぶっこましちゃった。[どっかで自殺しよう] 何回も思った。それで、ストーブんなかに、判子（はんこ）からね、米の通帳から、身分証明書から、ぜんぶ燃やしちゃった。

〔それでも〕東京まで行ったらね、自動車賃がなくなっちゃって。で、上野で下りたかな。下りたらね、すぐ、おまわりにつかまっちゃって。「どこから来たんだ！ 全生園か？」つうから、「いや、全生園、おれ知らない」つったんだよ。「あんたみたいな病人が〔入ってる〕全生園というのがあるんだ」と。「ちょっと待ってくれ」と。電話したらね、「いや、そういう人、いてないですよ」と。それで、「こういう人いるんだけど、入院させてもらえるか」って言ったら、「いや、いっぱい、もう入れない」と。それで、そっからね、こっち〔=栗生楽泉園〕へ電話したら、「こっちはまだ余裕があるから、こっちへ来なさい」と。で、そのおまわりさんが、わかればお礼したいんだけどね、自動車賃から弁当代からみんななくて。で、軽井沢来て、ここへ行けばいいんだと。

で、ひとりで来たんですよ。いるとこないんだから。とにかく、なんでも行ってみようって。〔私は、草軽電鉄は、乗車拒否されることなく〕乗れました。そのとき、まだ、私は、それほどひどくなかったから。顔にね、色がぼおっと出てるくらいで、すぐ見ただけではわかんないくらいだった。なんにも言わずに乗せてくれて。それで、電車が途中で動かないから、押したんですよ。坂道で。いっぱい乗るとね、電車が動かなくて。「お客さん、悪いけど、押してくんないかい」って。押したんですよ。

それで、草津の駅おりたらね、おまわりさんがいて。「こっち、知ってるか」って。「いや、はじめてだ」って言ったら、「じゃあ、私が案内するから行きましょう」って。そのおまわりさんもよくやってくれてね、「ごはん食べたか？」「いや、まだだ」ついたら、「じゃあ、食いな」って、うどんをとってくれて、そこで一緒に食べて。いやあ、そのときは、ものすごく寒くて、雪がね、こんなにあっただですよ。それだけは忘れんけどね、〔昭和24年〕3月の18日。それで、おまわりさんが一緒に来たんですよ、歩いて。で、官舎のどこまで来たらね、職員が、出勤する人がいて、「この人、行くんだけど、乗せていってくれないか」と。それで来たんですよ。

いやあ、来たらもう、すぐ逃げたくなった。見たら、すごいんだもの。

入ると、収容病棟へ入れられるんですよ。ここにいる人の顔見たら、ああ、こうなるかと思ったら、もう嫌んなって、逃げようと思ったんですよ。

こっちは、逃げることばかり考えたけどね、もう、監視みたいのついてるんだもん、逃げられないですよ。逃げたって一銭もないんだし。……

ある入所者（男性、1952年長島愛生園入所）は、発病から入所までの経緯をつぎのように語った。入所時12歳で、ただ「兄貴のどこへ行こう」と言われて連れられてきたのであり、「強制的に連れてこられたという感覚はない」と言いながら、自分がどんなところに「収容＝隔離」されるのか、わからないままの入所であった。

〔入所は〕昭和27年9月の16日。12歳のとき。うちでは、ここに、5人きょうだ

いの長男が、先に入ってたんです。だから、長男と末っ子〔の私〕がここへおって、なか3人が外へおったわけ。

小学5年生の冬、家で炬燵（こたつ）で、足、火傷して。やっぱし、炬燵で火傷というのが、もう、ようするに、麻痺が始まって、この病気の特徴だね。そんで、手も曲がってきて。学校で朝礼すると、先生が「きをつけえ！」言うてやるじゃん。「手を伸ばせえ！」言って。いつも、こうやって、叩かれてた。この曲がった手を、校長が、朝礼で、「こういう曲がった手を、生姜手（しょうがで）というんじゃ」って。

曲がりだすと、おふくろが、「尻の下に手え敷いて、毎晩寝なさい」言うんだ。だいたい、いつも、お尻の下に、こうやって敷いて寝るわけよ。アハハ。わたし、そうやって実行してきてな。それで、あんがい、こう、曲がらんですんだかなあちゅう感じする。利かんけど。

小学校6年生の夏休み終わってから、親から「もう学校行かんでええ」言われて、学校行かなんだわけよ。9月15日の晩に、夜汽車に乗って。おふくろさんが「一緒に兄貴ところへ行こう」言うて、連れてこられたんよ。「あっち行ったら、おいしい魚食べれるよ」とかね。まあ、家、百姓だからね、貧乏だから、そう、なかなか、お魚なんか食べれん。「兄貴とこへ行ったらな、魚なんかよく食べれるよ」言いながらね。

わたしとしては、まったく、なんにもわかってないからね。とにかく「兄貴とこへ行こう。兄さんとこへ行こう」言うて、夜汽車で。それでも、きょうだいとは泣いて別れたのだけは、よく覚えてるけどね。連れていかれるちゅう感覚があったんかなんか知らんけどね。しばらく帰れんちゅう話はあったから。やっぱり、泣いて別れて。夜汽車に乗って。次の朝、こっちへ着いて。

一緒に、おふくろさん、連れてきて。ただ、手え握ってついてきたいう感じだわな。

もう50何年なるねえ。もう、どこにも行かずに、籠の鳥です。〔昭和27年の〕9月16日に来て、光田健輔先生の診察受けて。回春寮の収容所いうところに1週間おって。それから少年舎いうところへ行って。

2003年に社会復帰をされたある長期入所経験者（男性、1950年星塚敬愛園入所）は、発病から収容までの経緯を、つぎのように語った。文字通りの執拗な入所勧奨であり、語りも長くなるので、概要をあらかじめ述べておこう。

この人は、1922（大正11）年生まれ。尋常高等小学校から、農学校、そして、高等農林専門学校を卒業し、さらには、農林省の農事研究所で研鑽を積んだ。22歳で、鹿児島県の農業試験場に技官として勤める。このころ、腕に斑紋ができ、試験場の助手に「らい病」を疑われ、人事課長に密告の投書がなされる。大学病院での検診は切り抜けたものの、再度の投書で、1946（昭和21）年に星塚敬愛園での検査を受けざるをえず、「らい」と宣告され、入所を促されるが、そのときは、同行した父と一緒に帰宅した。県庁には辞意を表明したが、優秀な技師であったので、しばらくは勤務が継続できた。けっきょく、1947（昭和22）年12月に、辞表を提出して、実家に戻る。しかしながら、〈職場からの排斥〉のあとは、〈地域からの排斥〉がつづいた。役場と敬愛園の職員による〈執拗な入所勧奨〉によって、地域での居場所をうしない、ついに、1950（昭和25）年9月12日、収容の車に乗った。

〔症状が〕はじめて出たのは、〔数えの〕22歳ですよ。ここ〔＝腕〕に、斑紋ができてましてね、それがなかなか治らんわけですよ。「ここ、見てごらん。俺、斑紋ができてよ。どうしたんやろか」と言いながらね、それ1年くらい治らんかったから、おかしいなど。

風呂に入るとね、自分で目に付くところに、いまでいう1円玉くらいの大きさですよ。痛くも痒くもないし、腐るわけじゃない。でも、それがずっと消えないわけ。らしいの病気をよく知ってるんだったら、これはもうハンセンの始まりだとわかったかもしらんけれども、そんなものなんにも知りませんから。

県に1年以上勤めてから、戦争が終わってまもなくだから昭和20年だったと思うんですがね、暮れに人事課長に呼び出しを受けましてね。「なんでしょうか」って言ったら、「君にはこういう投書が来てるから」と。◎◎はなんだか病気のあれ〔＝兆候〕があるようだから、一緒に働きたくない、と。自分の仕事場の農事試験場に〔職員が〕10名ほどおりましたから、そのなかで、あいつおかしい、大学病院の診察を受けさせると、田舎の町医者じゃだめだと、〔私を密告した人がいたわけです。〕

その頃は、私は、非常に貴重な存在だったんですよ。農林省の農事研究所に行くなんて、各県から1人もよう行かない。九州から1人行くようなところに、私は行ったわけだから。そして、「◎◎技官に聞け」「◎◎技官のところになに〔＝相談〕したほうがいいんじゃないか」ということでね。ま、なかには、◎◎さんだけ大事にされてというあれ〔＝やっかみ〕もあったかもしれません。そのころから、感覚が薄れたんだと思うんですよ。この病気は、物を落とすような時期がありますからね、そういうことをなに〔＝目撃〕した人のなかに、やっぱり、そういうあれ〔＝ハンセン病の患者〕が、親族かイトコかあるいは知ってる人におったと思うんです。そういう人がね、「◎◎さんはおかしいよ」と。

私が見る限り、〔その投書には〕「らい病」とは書いてなかった。「見るべ？」って人事課長が言うから、私は〔その投書を〕読みました。当時は、若い男は〔兵隊に取られて〕いませんでしたから、女の子が助手でたくさんおった。〔投書は〕女の文字でしたけど、もう、それこそ、頭が真っ白になっちゃってね。なんで、人のことを〔告げ口するのか〕って思って。見たら、健康の検査をしてこい、診断書を取って使ったほうがいいですよ、というような意味のことが書いてあった。

だからね、私は、「よし、行きますよ。診断書を持ってくればいいんでしょ」ということで、すぐにあくる日、休みをとって大学病院に行きました。そしたら、私の勤め先から大学病院に手紙がいったですわ。◎◎をやるから、頼むと。で、行ったらね、チョークで、丸く描いて、「あんたはここにいなさい」と。他の人はみんな、ごちゃごちゃに並んで。私ばっかね、変なことするなあと思って、そこに立ってわわけですよ。で、「◎◎さん、いらっしゃい」ということで、ハンセン病の、いろんな検査がありますわね、針を刺すとか、筆で触ったり。変なことするなあと思って、「先生、なんかあるんですか？」「いや、これじゃあぜんぜん出てこないんだけど、この投書は、あんたがらいだということでの投書だよ」というようなことを皮膚科の部長が言うから、「どうしてえ？」って言ったら、「いや、大学ではこれ以上の検査はできない

から、すまんけど、鹿屋（かのや）に星塚敬愛園という専門の病院がある。そこに行ってみる必要がある。〔とりあえず〕うちじゃあ、健康だというふうに書いて、あんたの勤務場にはやるから」と。「ああ、そうですか。それはありがとうございます」と。そのときに、「らいじゃないか」というその言葉に、弱ったなあ。その晩は、家内ともね、〔大学病院で〕こういうことを言われたと。もうそのときはね、〔長男の〕Yがおるわけですから。Yはもう、ヨチヨチ歩きぐらいしよったから。だから、〔もしほんとうにらい病だったら〕大変だと思っはりましたよ。

〔とりあえずは、健康だという診断書をもらえたので〕そのまま半年ぐらい働きました。そしたら、半年後にですね、今度は激しい投書が来まして、〔人事課長から〕「敬愛園に行って、らいじゃないという診断書を取って来なさい。それ取りさえすれば、また復帰できるんだから」と〔言われました〕。

私もひとりじゃ怖くなって、町議会の副議長しとった親父と一緒にいったんですよ。「おまえがそんな病気であるはずがない」って、親父はぶんぶん言いながら、ふたりで行ったんですよ。敬愛園の、庶務課というところに行ったら、女の子がおって、こうこうでって言ったら、「あ、わかりました。医務課長さんを連れてきます」。医務課長が出てきて、「それじゃあ、ちょっと、診察室に来なさい」って診察室まで連れて行って、「手を出しなさい」。こうしよったら、「あ、これは、あなたは、まちがいないよ」と。10本の指を出したらね、左の小指がね、少うし、ピンと伸びんのですよ。伸びなかった、そのときに。〔それまでは〕なかった、そんなこと。それで、力を入れれば、力を入れるだけ、伸びないわけ。ありゃ、と思っはね。「あんたはもう、間違いなくハンセンだ」と。そのころハンセンなんて言いません。「らい病だ」と。〔「病気だとわかって」〕ほんとうに、よかったね、あんた。すぐ入んなさい」と。「いいところに勤めておるんだから、早く入って、早く〔治すことだよ〕。少なくとも1年から3年おったら、間違いなく、あんた、治るから、入んなさい。もう、帰らんで、このまま入んなさい」と。「先生、私は勤めも持ってるし、妻もおるから、簡単にそうはいきませんよ」なんて言ったら、「簡単にいかんで、あんたは、らいに間違いはないよ」と。〔「疑うのなら」〕血液をとってなんとか……」って、やかましいことを言うから、そばに座った親父が、「先生、これは私の息子だから、私が連れて帰りますよ。そんな変なことを言ってもらっちゃ困る」と言いましたらね、「いや、お父さん、ちょっと黙っててくれ」と。〔それでも〕親父が、「〇〇、もう早く帰ろう。こんなところにおったら、ほんとうに、その病気になっちゃうぞ」って。それで、医務課長に、「とにかく、職場に帰らんといかん。1日の休みをもらってきてるんだから。大丈夫だ、元気だという健康診断書をください」って言った。「そんなことを書けますか」という。「いや、くださらなかつたら、くださらんでいいですよ」と。それで、帰ってきちゃった。

〔それは昭和〕21年だったと思います。〔最初に大学病院へ行ったのが、昭和20年の〕11月だった。〔敬愛園に行ったのは〕それから半年後ぐらい。もう上着を手に持って歩く時期だったから、5、6月ごろだったと思いますね。

〔ものすごいショックを〕受けましたねえ。もう、ちつとやそつとのショックじゃなかったわ。とにかく、妻がおって、子どももおったでしよ。こんなことでねえ、と思っは。らいつてどういう病気ですかということも、その医務課長に聞けなくて、自

分で書店に行って、医学書を探しました。「癩」「癩」「癩」って、一生懸命調べても、らいの専門書は余計ないんです。で、うちの親父が、職業柄っていうんですか、議会におったから、そういうことを〔町の〕衛生課長から聞いてきたんですよ。「〇〇、らい病は、おっかない病気らしいよ。おまえは、そんな、らい病とちがうんじゃないか」って言うから、「いや、あの先生はそう言うもんな」って言いながら、もう、その先生が憎たらしくなるぐらいね、ほんと、なに〔＝苦悩〕しました。それからもう、1週間ぐらい、うちにおって、そのころ、電話は部落に1本あるぐらいでしたから、家内に内緒でいて、1週間ぐらい親父といろいろ相談しましてね。それから、人事課長のところへ行って、もうはっきり、「私は辞めます」って言うたんだ。「健康診断書はとったんか、とらんか」って言うから、「行きました、敬愛園に」って。〔敬愛園の〕医務課長の話で、「おまえは擬似らいでもないよ。ほんとのらいだよ」ということだったんで、私はそのとき聞いたの、「擬似らいつて?」「疑わしいのをね、擬似らいというんだ。あんたは、擬似らいじゃなくて、間違いなくらいだ」と。〔その擬似らいという言葉を使うことにして〕「あの、擬似らいだというようなことでね、診断書をくれなかったよ」と。ちょうど農地改革があったころで、〔私がうちに戻れば、兄弟で〕山分けしても、ひとりぶん、2町歩の田畑、山もその2倍ありましたからね、親父が、「県庁を辞めたほうがいいんじゃないか。辞めろよ、辞めろよ」って。もう、それ以外にないもんだからねえ。こんどは、親父が滅入ってしもうて。でも、それから、なんとかかんとか言いながら、まだしばらくは勤めましたからね。〔辞めるといふ〕自分の決心をね、県庁が受理するかせんかということ……。まあ、ちょっと県庁でも問題になりましたよ。◎◎っていったら、県庁でもね、優秀なほうに入とったから。まだ男手が少なくてね、兵隊の技師がたくさん帰ってくるけども、そんな技術を持ったやつはいないでしょ。私は、屈指の技術者だったからね。新しい品種を作り出す仕事を試験場でしよったから、〔辞めさすのは〕もったいないというあれ〔＝考え〕を、県の上司の方々も〔持っていたんだと思います〕。

〔最終的には〕昭和22年の12月に辞表を出したような気がします。農業で食っていかにかやしょうがないな、と。〔だから、ハンセン病との診断を受けてすぐに辞めたわけじゃない。〕仕事はきちんきちんとできるんですから。熱がでるわけじゃないしね。傷ができるわけじゃないしね。どうだこうだと言いながら、それこそ、1年ぐらい、働いたような気がします。試験場には、農業技術生もおるわけですよ。市町村の農業技術員に技術を教えていくわけです。私は若かったけど、そういう連中から大事にされとったですもん。「先生、先生」って。

1年ぐらいしたら、私の上司の技師長から呼ばれて、「◎◎君、どうする、あんたは?」って。私も、もうはっきり進退を決めたほうがいいんじゃないかと思ひましてね、「そしたら、先生、辞表出しますか?」と。「それしかないだろうね。俺もいろいろとナニしてみたけど、やっぱり、これだけ人がね、おかしいじゃないかと……。私は、そのときはほんとに、小指がね、少しどころじゃなくて、もう半曲がりしてきましたから。私はできるだけ人の前じゃあ、なに〔＝気づかれぬように注意〕したつもりですけども、若い女の子たちがね、「もう、◎◎さんとは働くのは嫌だ」と……。

敬愛園に行ったあと、早く健康診断書を出せというのを1年ぐらい放置しておった

んですが、こんどは、自分の部署からね、なんと言いますか、怖い……。そのころは怖い病気だったですもん。自分自身がですね、怖かった。もう敬愛園に行ったらね、親父と私も震えながら敬愛園に入ったこと覚えてるもん。もうガタガタガタガタ震ってね、この膝が震えるのわかるぐらい。親父も真っ青ね。そういう状態でしたから、世間からね、私たちはどれだけ怖がられたか。それが日本の政策だったわけですけども、そういうふうな病気になった当時はですね、まず、自分の職場から排斥運動が始まったと思いますよね。その連中もね、排斥じゃなく、自分自身の体を守るためのね、あれだったと思いますよ。

〔けっきょく、辞表を出して、実家へ戻ったわけですが〕そのときは私だけ帰ったわけです。家内と子どもは〔鹿児島市に〕おってね。家内も百姓ができるわけじゃないし。

うちに帰ってもね、〔私が県庁を〕辞めたという話が〔伝わって〕、みんな、いろいろ様子を見に来てね、「こんな田舎の、田畑を少しぐらいもらうより、県庁のほうがずうっといい。そんなばかなことしなさんな」と言うひともいたり、役場のほうからはね、「なんで帰ってきたの？〔こっちにおるのなら〕役場の加勢をしてくれんか」と。〔あるいは〕「あんたが、百姓なんかしなさんな。〔自分で〕百姓するよか、俺んところに来て、教えてくれよ」と。稲にしても、サツマイモにしてもですね、いろんな育種のあれ〔＝改良〕をね、やってきたわけですから、そういう技術を教えてくれと。

〔じっさい〕百姓を自分でやってみようと思ってもね、それこそ、技術はよく知ってるっていても、うまくできないですよ、百姓は。でも、それを半年もやりますと、自然とできるようになります。その代わりにね、体はもう酷使します。だから、ガターッと体が悪くなりました、いっぺんにね。半年のうちに人間の体が変わっちゃいます。もう、ハンセン独特のね、結節が、ぼこぼこに……。〔病気が〕騒ぎ出したわけです。ほんとにもう、たちまちのうちに悪くなりましたね。顔に出るし。手に、傷を作りますわ。感覚がなくなってるってことですよ。マメを作ってね、それが治らんわけですよ。そのマメがこんどは腐っちゃって。そのころはいい薬があるわけじゃないし。いまはペニシリンのいい薬がありますけどね。

それまではね、85円から95円という、判任官としては一番上のほうの給料をもらっておったのに、辞めたらね、それが無いわけよ。退職金って、わずかな、200円もないような退職金しかくれなかったですよ。だから、百姓をして、家族を養わにやいかん。米を作らにやいかんし、食べ物を作らにやいかんのが百姓でしょ。それで、私は百姓しながら、鹿児島におる親子に、1ヵ月1回ずつは、米やサツマイモ、あるいは食べ物をね、リュックサックに入れて持っていかなくちゃいかんし……。

そのころはもう、親父は、私よりも半病人になってしまいました。だから、〔私は〕おふくろを一生懸命加勢して、百姓をしよったけれども。まあ、そうしてるうちにですね、私の部落はものすごい騒動ですよ。「〇〇さんは、あんな偉いところに勤めているながら、辞めたのは、どないしたんじやい」というて。そのうちに、敬愛園のほうからですね、県のほうに、◎◎〇〇はらい病だという報告があつて。それから、大変だった。

県の衛生課から、町の衛生課に連絡が来るわけですよ。それが来たら必ず、町の役

場から町内会長に、「◎◎○○はらい患者の模様」という連絡が来るらしいですよ。そして、役場から、衛生課長と女の子と2人で〔うちに〕来ましたよね。町内会長も来ました。らい病だから来たというようなことは、はじめは言いませんよ。病気のことです。来たと言わないで、「○○さん、どうして県庁辞めた？」〔親父は〕「農地改革だから、土地を少しでも長男にやりたいために、県庁辞めさしたよ」「もったいないですねえ」って。そういうふうなことで、1、2回、課長が来ました。そのときには、必ず、その女の子、いまでいえば保健婦みたいなのをね、連れて来よったです。「あの女、くちやくちやくちやくちやくち私に質問する。あいつはなんて失礼なやつや。その女を連れてくるな、うちに」と私は言ったことがありますもんね。それがね、〔まわりに〕わかるようにするんですよ。女性もその課長も、医者が着る白衣、あいつをね、うちから100メートルぐらい前から着てね、その白衣をちらつかせて、威張りやがって来るんです。

それで、うえのおばちゃんが、「変な人が最近よう来るじゃないの」と言うわけよ。「医者かなんか知らんけど、白いあれを着て、なんか変な服装で来るよねえ」って。〔とにかく〕そういうやつが来てね、部落を歩き回るわけよ。うちへ来るという用事がすんでからもね。〔当時は〕民生委員というやつは、強かったんですよ。その民生委員が、医者とか女の子、課長と一緒に来ましてね、親父に「○○どんはおるけ？」「いまは畑にいて、おらんがな」と。そして、親父に〔あれやこれや〕一生懸命言うらしいんですよ。それで親父は「もうわかった。俺はもうその話は聞きたくないから」って、親父は逃げよったらしいですよ。それで、「しょうがないからもう、○○さんに直接話をしよう」ということで、「県から、〔あなたは〕らいだから敬愛園に行きなさい〔という連絡が来ている〕」ということをね、3、4回してからですね、〔私に〕通知したんですよ。

それからもう、その連中が来るのが、ほんとに私は、怖くなったり、憎くなったりね。〔敬愛園の看護婦もやってきて〕私に、しつこく責めるんですよ。「○○さん、そんなに逃げんでもいいが。乳飲み子がいちばんうつるよ。あんたは自分の子がかわいくないのかね」とか、もういやらしいことばっかり言うんですよ。なにせ、そのときはもう〔長男のほかに〕妹〔たち〕もできてました。「自分の子どもがかわいくないバカ親がおるか」って言って、そいつとケンカしたこともあります。

そして、その年に敬愛園に行かなくちゃいかんということで、〔昭和〕25年の9月12日に、敬愛園に入院しました。もう入院しなくちゃしょうがないぐらい、自分の体がね、ぼろぼろになっていました。

そういう苦しい、嫌な時期がありました。看護婦が私のところに来ての嫌がらせ。それから、もう、部落みんながね、私が歩くところを歩かんごとなったもん。私が歩くと、その道を嫌ってね、私の〔歩いた〕道を通らん。こんどは私が逆にね、遠道して、ほんとの道を歩かんごになってしまうんですよ。私とすれ違うのを嫌がるんですよ。部落みんなが、私をね、村八分どころじゃない、もう早く敬愛園に行ってもらわにゃ困るといふあれ〔＝雰囲気〕を作りだしたわけ。親父も、とうとう、町議会の副議長を辞めなくちゃならんごとなりました。あれだけ元気だった親父が、いやに弱くなりましてね、もう議会にも行かんごとなってしまうて。

俺は俺で、親父とも喧嘩しだしたんですよ。「俺がこういう病気になったんは、私み

たいな奴ができるように、あんたが、なんか悪いことしたんじゃないか」というようなね、親に抵抗するような、親に悪口を言うような人間になってしまったですね。自分の身も心もですね、それこそ悪い人間にね。[いまでは] 申し訳ないなあと思っておるんですけども、自分の身は立たんし、収入はないし、金はないし。そして、「敬愛園に行け、敬愛園に行け」「らい病じゃ、らい病じゃ」というように人から言われておるし、町内会の会合があるんですが、そこへもう、親父も行かんごとなりました。で、おふくろが行くと、必ずね、「〇〇どん、〇〇どん」って、私の話が出てきて、「若いんだから、早く敬愛園に行って、治療すればいいのになあ。そういう書類も役場からきてるぞ」ということを、みんなおる目の前でね、言い出すようになったからね。だから、これじゃあいかなんと思って、[昭和] 25年に……。

正直に言うて、[郷里に] 帰った当座は、青年団長もしました。町のいろんな役目もやりました。しかし、自然とね、みんなからね、[そういう役職が] できないようにされたんです。それでもう、そのころまだ手足はどうでもなかったんですけども、浮腫。顔なんかね、膨（ふく）れてくるんですよ。腫（は）れるみたいに膨（ふく）れるんですよ。らいの特徴なんですけれども。それが膨れてね、色が赤くなるんですよ。だから、ふつうの顔色じゃなくなつてね。百姓して苦労すりゃあ苦労するだけね、それがひどくなるんですよ。夜なんかね、もうほんとに、その顔が痛くて。あれは熱発（ねっぱつ）してると思いますよ。熱が出てたと思うんですよ。寝れなくて。もう俺もひとりじゃ大変だから、家内にね、「あんたも帰ってきて、百姓、あんたも稽古せんと。もう俺ひとりじゃできんから帰って来いよ」と。で、1年目に、家内を呼び寄せて、百姓の稽古をさせました。それこそ、草取りはね、「これは悪い草だ。こういうふうなあれは捨てなさい」と。「これは、肥料になる草だから、大事にとっておいて、肥料代わりにしなさい」とかね。そういうことをね、教えるようなことになりましたね。

[昭和25年9月12日には、星塚敬愛園まで] 収容で来ました。もう、2回も3回もね、車が、私を収容に来ました。8人か10人ぐらい乗れるバス。

民生委員がね、親父の2、3級上の従兄（いとこ）でね、親父に、「もう〇〇は、敬愛園にやったほうがいいんじゃないの。これ以上ここにおつてもらっては、あんたがたも大変だし、部落のね、恥にもなる。町（ちょう）の恥にもなるよ」と懇々と言ったそうで、親父も、「もうたしかに、仕方がないから、敬愛園に行かんかい。あとのことは、俺がなににするから、心配せんで行ってくれ」って。そうせんと、私の下に、弟なんかもおるわけですからね。みんな、クラスの級長しよつたから、あの連中も学校へ行っていじめられるんだ、と。「おまえのあれ[=兄貴]はこうこうだ、ということで、いじめるから、もうこの際、行ってくれんか」と。

[収容の車が最初に来たのが] 田植えをすころやったから、6月ですわな。そして、3回目のときに、そういう話し合いをしたんです。父も、私に「もう行け」と。私も覚悟を決めて、行こうと。

そのとき、医務課長と△△さんと、平の看護婦が2人来たよ。その看護婦はやさしかったよ。「行きましようかねえ。敬愛園はいいところよ」って言いながらねえ。[それまで] 連中は、私にてこずつておつたからね。なんでもね、一言うたら、十ぐらい言い返してね、「きさまらは」って言いよつたから。私のうちには昔の刀がありよつた

から、「あれで叩き斬るぞ」って言ったこともあるんですよ。刀を持ちだしたらね、おふくろがもうびっくりしよって、「〇〇どん、それだけはもう助けてくれ」って言ったことがあります。そのくらい、もう、異常になっていましたね。

ある入所者（男性、1951年大島青松園入所）は、発病から入所までの経緯について、つぎのように語った。

〔ハンセン病にかかっているとわかったのは〕入園の1年前。16歳のとき。西暦でいうと1950年。昭和でいうと25年。

17歳〔の誕生日の直前〕で、高校に退学届けを出して、〔大島青松園に〕入りました。

大腿部に、俗にいう、タムシのようなものができたんです。初発症状。それと、そのちょっと前に、知覚麻痺が部分的に足に出てて、痺れてるっていう部分が、考えてみれば1年ぐらい前にあったような気がするんです。それから、顔に出始めた。顔に似たようなものがポツンポツンと出始めて、それから、あわてて、これはなんだということで、大学病院、県立病院、市立病院、個人の開業医っていうふうに、なにかわかんないから、訪ね歩いて診断を受けたわけですが、4カ所も5カ所も。それでも、いわゆるハンセン病の専門医に出くわさなかった。まあ、だいいち、いなかったんですけども。だから、「ひょっとするとハンセン病かもしれんけれども、わしにはわからん。確定診断をどうしても受けたければ、療養所に訪ねて行ったほうがいいんじゃないか」というふうに勧められたわけ、2、3の医者からね。

あの当時はまだ「らい病」と言っていましたので、両親は愕然としたらしいんだけど、身内にそういう人はひとりもない。だから、まさかとみんな思ってたわけだけど、だんだん症状が進んでくるようになってきて、早期発見・早期治療というのが病気の治療の原則なんで、もうそこに行ってみようという腹がまえを、家族みんな決めて。

両親は両親で勉強したらしいですけども、ハンセン病療養所というのはいったん入れれば出てこれないとか、退所はもとより文通もできないとか、というふうな情報を両親がどこからかキャッチして、それから、私に言わないで、両親はずいぶん逡巡したらしいんです。17歳の多感な世間知らずの子どもを、生涯手放すことになるかもしれないと考えて。ギリギリまで、やっぱり、ためらっていたみたいです。だけど、だんだん症状が進む傾向があるんで、もし、そういう病気が世間に知れたら、それは大変なことになる、ということで、とにかく高校に退学届を出した。

それで、もう家を出るということで、両親も、「ひょっとしたら、ハンセン病かもしれんよ」「まちがないんじゃないか」ということを、医者から聞いていたようです。ショックをおぼえさせちゃいかんと〔いうことで〕私には言わなかったけれども。だから、これは最後の別れになるかもしれんという前提で、日が暮れるのを待って、こっそり母親に連れられて、北九州のうちを出た。九州に、熊本とか鹿児島にあるということはいろいろ調べてわかっていたんですけども、なるべく遠くに行ったほうが秘密が守られるだろうということで、あえて四国の療養所を選んで、香川県にある大島青松園に行ったのが、昭和26年の3月20日。

周囲4キロぐらいの、高松の沖8キロぐらいのところにある大島という島の全部が、ハンセン病療養所と言ってもいいぐらいな、狭い、小さな療養所でした。

まず棧橋をあがって、電話で前もって言ってましたので、主治医がもう待ってました。まず、主治医の診断を受けた。もう、たちどころに、「これはまちがいない」と、即断をされました。それから、施設側の受付に行って、そこで言われたことは、「もう入らなくては困る。あなたは、ここでずっと、これからもいるという前提で、きょうは正式に入園をしてもらいますよ」と。

〔高校には〕退学届を一方的に出した。そこまで手続きをして家を出るということは、ひょっとしたら、帰って来れないのかなあという、半信半疑の気持ちはありましたよ、私のなかにね。だけど、聞いても両親は答えなかった。「行ってみなけりゃわからん」ということで。〔私自身は〕「専門医の診察を受けるために行ってみようや」というふうに、おふくろには言われていました。

両親は、どうも、わかってみたい。わかっていたから、1年でも自分の手元に置いときたいという気持ちが、強かったみたいですよ。

ご自身では、上述のようなかたちでの療養所への入所をどのように考えているかとの質問に、この入所者は、「強制入所だと思ってる」と明言した。

私は、強制だと思ってる。それはなぜかという、大学病院に行っても、その他の公的医療機関に行っても、ひょっとしたら、という医者の判断があって、両親とのやりとりのなかで、「もしそれだったら治療していただけますか」とまで突っ込んで話をしてみたいです。あとから聞いたんだけど。「私のところの大学病院でも、県立病院にも、その病気の治療薬はいっさい置いてないし、専門医もいない。あなたの病気は、療養所に行かなければ治療ができません」というふうに言われたわけです。好むと好まざるとにかかわらず、病気の治療を受けなければ、療養所に行かざるをえない。「癩予防法」がそうなたわけですから、自然に療養所に行かざるをえない体制がしかれてた、ということなんですよ。だから、それは、私は強制隔離をされた、と〔判断せざるをえない〕。

ある退所者（男性、1953年星塚敬愛園入所）は、発病から入所にいたる経緯について、つぎのように語った。

私が〔星塚敬愛園に〕入園したのは昭和28年の4月16日ですが、私の父親が発病したのは22年。私が、だいたいはっきりわかったのが、〔小学校〕5年生か4年生ですので、昭和25年か6年。親父が入園した後だと思うんです。

当時は「らい」と言ってたと思うんですけど、そういう言葉も知りませんし、〔むしろ〕親父が療養所に入って、自分の境遇がガラッと変わってしまったからね、いままでと。だから、病気になったときのショックっていうのはあまり受けてないんですね、そのときは。病気が最初にわかったのは、おへその上にちょっと白い点がぽつとあったっていうだけの状態。そのあとから手が悪くなって、いじめられ

たりしはじめてから、あ、これは大変だ、っていうことになってきたんだけど。最初わかった段階では、とくに知識がありませんでしたね。小さかったから、わかんなかった。

まず、左手の小指と薬指が感覚がなくなってきた、力が全然入らなくなっていて、伸びなくなったんですよ。冬のうちはいいわけだけど、あったまってきたときに伸びないと、子どもはすぐ気がついちゃうわけですね。自分もそうだったけども、周囲が気がついた。容儀検査（ようぎけんさ）っていうのがありましてね、そうすると必ず、手を伸ばせとか、指を見せるとかってあったわけ。で、けっきょく、伸びないから、「おかしいじゃないか」って。「あ、あそこの息子、やっぱり、らい病だな」ということに、たぶんなったんだろうと思うんです。

〔父はすでに〕入園してました。それはもう、大変なことだったわけですから。昭和25年からの、いわゆる「第二次無らい県運動」が徹底的にやられて、やむなく親父が行ったという状態ですからね。そういった前提があったので、私は知らないけれども、周囲の人のほうが知ってる。周囲の子どもたちは知ってるわけですよ、親から聞いてるから。知らないのは私だけという状態だったろうと思うんです。

「らい病」っていうよりは、とにかく、なんでおれをいじめるんだと。それまでは、私も、級長とか、副級長やって、どちらかっていうと「人をいじめるな」って言うほうだったから、私の同級生からは、じかにはやられてないんですよ。みんな、下級生にやらしてるんですね、石を投げたりなんなりするの。

その前に、もう、おふくろ自体が、その村では生活がやっていけないという状態に追い込まれて。細かいことというと、親父が鹿児島県の農業試験場の次長をやってたんですが、県庁の身体検査でわかっちゃって。それが〔昭和〕22年ぐらいにわかって。親父は、もうしょうがないということで、家族一家ぜんぶ田舎に引き揚げた。そこでおふくろに農業教えて、そして親父は療養所に行こうという算段だったらしいんですけども、そのかんは3年ぐらいあったんだね。そのかん、しょっちゅう、保健所から、いわゆる強制収容の車が、進駐軍の払い下げのでっかい車が来てましたね。

親戚関係は、最初は、農機具とか貸してくれてたんですよ。それを借りて、おふくろと私で、それこそ朝3時4時に起きて、田畑やってたんですよ。しまいには、けっきょく、貸してくれなくなったんですよ、親戚もね。

こういった状態のなかでは、もう、おふくろもとてもやっていけないというふうに思ったんですね。で、おふくろは、村を出て、美容師になると。ちょうど、私は、もう病気になっていたから、私は、とにかく、1年間、療養所に行って治療しとけ、と。で、行ったのが、〔昭和〕28年の4月16日。

で、私がそういったふうに決めて、おふくろと話をして、「じゃあ、私も仕方がないから行く」と。それなのに、私が、4月の、療養所に行く寸前になって、石を投げられるようになった。いまでもわからないですよ、誰が、どうして、そんなことがわかったのか。とにかく、ちっちゃい子どもたちに、下級生にやられて、「もう来るな」って言われたのが、数日間やられたってことですね。

この人も、上述のようなかたちでの療養所への入所をどのように考えているかとの質問

に、「実質的には強制入所でしょう」との判断を示された。

〔私の場合も〕実質的には強制でしょう。行かざるをえないようなふうにさせられたということですからね。これは裁判をやったから、そういったような表現ができるんですけども、そうじゃなければ、こういったこともしゃべらないと思いますが。これはもうずっといままで、石を投げられたなんだかんだってのは、非常に、私の自尊心の問題でね、いまだに消えない。これは完全なスティグマですから、私自身のね。

妹が2人いたんですが、下の妹は母方の祖母のところに預けて、いちばん下の妹は、当時3歳だったと思うんですがね、それは母の妹、叔母夫婦に養育を頼んで、おふくろはひとりで学校へ行った。で、私は療養所に行った。だから、親子バラバラっていうかね。私は、「1年間だけとにかく待っててくれ」と。

〔1年すれば帰れるというのは〕ずっと信じてましたね。だって、園長がそう言ったんだもん。「1年したらよくなるから、なにも心配せんでええから安心しとけ」って言った、入園するときに。それはずっと信じてましたよ。だから毎年毎年、〔園長のところへ〕「もう帰してくれ。もう帰るよ、もう帰るよ」って言いに行っただけなんです。〔新良田教室卒業後に退所するまで〕8年間続きました、それは。

その園長、いわゆる光田の直系です。光田先生の娘さんと結婚されてて。当時、やっぱり、カトリックの信者さんでもありましたからね、ひじょうにやさしい、すばらしい先生だというふうに、とにかく思っておりました。私には神様みたいに見えてた医者でしたね。